

■ フォト・エッセイ ■

サハラ砂漠のオアシス —— ニジェール共和国 ——

写真文
犬塚雅貴
Masataka Otsuka



標高1000メートル級の山々が連なるアイル山地では夏季に降った雨が地下水となりオアシスの農業を支えている

子供たちが家から小さなバケツを頭に載せて水汲みに向かった。直径二・五メートル深さ一〇〇メートルを越す井戸。使い終えた缶詰の容器を垂らし、今にも倒れそうな姿勢で必死にロープを握り、井戸で水を汲み上げる老婆はわずか一リットルの水を得るために力いっぱいそれを引っ張った。それは私がアフリカではじめて見た衝撃的な光景だった。

ここはアフリカ大陸の中央に位置するサハラ砂漠。気温三五度。季節は冬だというのに太陽の陽射しは燃えるように熱く、汗は流れ、砂が舞っていた。太陽で温められた熱風が吹き、目を細めながら砂漠の町を歩くと、何度水を飲んでも喉の渇きが癒えることはなかった。とにかく暑い。ホテルで洗濯したジーンズも二時間ほどで乾いてしまうほどの極度の乾燥地帯だ。ラクダが町を悠々と歩き、老人とともにロバが農作物を運ぶ。もちろん道は舗装されていない。柔らかな砂に覆われ、家は泥を固めて作った日干し煉瓦でできており、町じゅうが茶色に染められていた。

私がサハラを訪れるようになったのは一〇年ほど前。それから数年に一度の割合で様々な国や地域で取材を行ってきた。アフリカの三分の一という世界一大きいサハラ砂漠に魅了されたのは、小さな砂粒がくり出す巨大な砂丘だった。とくに朝夕の射光がくり出す光景は私を虜にした。

私は美しい砂漠を撮影する一方、そこで



往復約1500キロ、テネレという砂漠地帯を行くキャラバンは中世から塩を運び続けている

オアシスには小さな井戸が点在し、子供でも簡単に水が汲めるようにと欧州のNGOが足踏みポンプを取り付けた



早朝の砂漠で数頭のラクダとヤギを連れて遊牧の生活を続ける家族に出会った



懸命に暮らす人々にもレンズを向けてきた。中でも注目したのはニジェール共和国北部に暮らすトゥアレグ族だった。彼らは研ぎ澄まされた感覚で自らの位置を知りラクダで砂漠を渡り、ヤギなどの家畜を育て遊牧民として生きてきた。

「遠くに見える緑はオアシスだ。」二週間に及んだ砂丘の撮影を終え、ドライバーが嬉しそうに言った。白い砂の中を走り続けてきた私たちの前には木々や草が生い茂る場所が現れた。そこはかつてサハラ交易の中継地、今では砂漠観光の拠点となるアガデスから北へ約二〇〇キロ、車でおよそ六時間のティミア村だ。標高一〇〇〇メートル級の高い山々が連なるアイル山地の中央に位置するこの村は、周囲の砂漠地帯に比べると、標高が高く比較的過ごしやすい地域にある。実はここもサハラ砂漠なのである。通常、私たちが想像する砂漠というのは砂丘が連なる砂砂漠であるが、砂漠というのは雨の少ない極度に乾いた場所のことを総称して砂漠と言っている。石が敷き詰められた大地は黒砂漠、また砂に覆われた砂砂漠、そして隣国チャドの三〇〇〇メートルを越す、サハラ一高い山がそびえるティベスティ山地もその一部である。

ティミア村には夏に降ったわずかな雨が地中にしみ込み地下に豊富な地下水脈を形成している。その証拠に暑さに強いアカシアの木や水分の蒸発を防ぐ茎の硬い草が生えている。これらの植物は根を深く伸ばし、



高さ25メートル、アガデスで一番高い建物で町のシンボルとなっているイスラム教寺院（モスク）



ティミア村では野菜やナツメヤシの他、果物の栽培も盛んでグレープフルーツは北部の都市、アガデスにも運ばれる



乾いた大地に井戸から水を引き、丹精込めて育てるとうもろこし畑を見つめるサハラの民、トゥアレグ族

地中の水脈から養分を、さらに朝夕の寒暖の差から生じる露からも貴重な水分を得ている。山の上の上ってみると緑の生えている場所は谷底にあつて、山々を縫うようにして走っていることがわかる。「そう、かつてサハラが乾燥する前は、ここには豊かな川の流れたあつたのです」と、ティミア村出身でトゥアレグ族のヤヤさんは話す。乾燥化が進むにつれて水は川底に消え、その流れは地下水となって続いていた。潤れ谷の下に流れる水脈沿いにたくさん井戸を作り、農業を営む彼らは、「この水が私たちの命です」と口をそろえる。

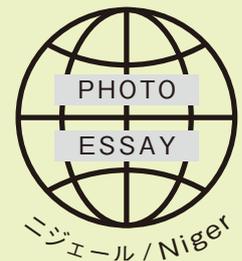
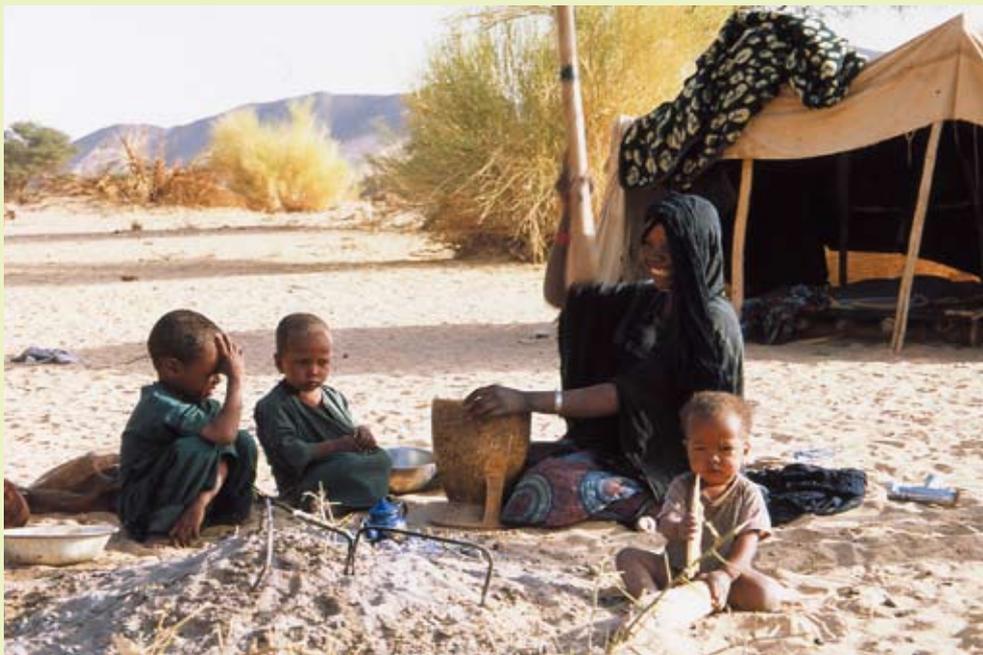
このティミア村には井戸を利用した作物がたくさん植えられる。黄色く色づいたオレンジやグレープフルーツ、そして大粒のぶどうが実っていた。ちょうど収穫していた村人からもらったグレープフルーツの皮を剥くと、ピンク色の実から果汁が飛び出した。白く薄い皮の中にはぎつりとした果肉が詰まり、口の中に入れるとジュースを飲んでいるような味が口いっぱいに広がった。「サハラの熱い太陽と、豊富な地下水のおかげでこの甘さができるんだ」と、男は笑顔で収穫を続けた。

その横では少年がラクダを引っ張って、タイヤのチューブでできた容器を使って井戸から何度も何度も水を汲んでいた。「ソーレツ、ハイッ」、「ソーレツ、ハイッ」と、少し嫌そうな仕草を見せるラクダの鼻を引っ張って畑に続く水路へと水を送っている。

タイヤのチューブでできた大きな容器を井戸に沈めラクダの力で
一気にくみ上げ、土で固めた手作りの水路へ水が流れていく



子供たちは学校から帰ると、水汲みに行ったり、畑仕事を手伝う。
子供の手も大切な労働力の一つだ



暑さの厳しい環境だが、彼らは移住することなくこの地を愛し、サハラでの暮らしを守り続けている

た。土で仕切られた畑にある水門を鍬で開け、土の乾いたとうもろこし畑に水を流していく。水は畑に注がれ、瞬く間に柔らかい砂の中へとしみ込まれていった。「手早くやらないと、水があつという間に消えてしまう」と、素早い動きで水の流れを目で追う男の子の顔には、うれしそうな表情と大粒の汗が浮かんだ。「彼らの小さな力が、小さな命を育てている。」ヤヤさんは小さくつぶやいた。大きなナツメヤシの木々に囲まれた畑の中は直接の陽射しが遮られ、湿度も低いので涼しさを感じる。また、適度な日陰を作ること、水の蒸発も防いでいるという。「水がなければこの村はおしまいだ、この水のおかげで私たちは生かされている」と、水の大切さを訴える彼らの言葉が私の心に深く突き刺さった。

かつて四〇〇年前、サハラ砂漠は雨が降り緑ゆたかな草原が広がっていた。牛が草を噛み、馬が大地を走り、多くの人々が狩猟や農耕を営みながら暮らしていた。アイル山地の岩陰にはそんな当時の様子を描いた岩絵があちこちで見られる。今では深刻な砂漠化の影響を受けて、雨の少ない高温な気候が続いているが、それでも、彼らはここに住み続けることを誇りに思い暮らしている。それはきつと無の大地から緑を育み、それを守り続けてきた証なのかもしれない。

(おおつか まさたか / 写真家)